

次 目

聖訓摘要	本多日生
日蓮宗概観(其九)	梶木顯正
思想の三綱格	橋本辰居
題目寸言抄	林郁夫
延山偶成	金子生
開目鈔講話(第十一講)	小林一郎
大なる悦と歡(下篇)	まじ
記事	
○本部附報	
大藏經要義續篇(其六)	本多日生
○誌料領收	
○編輯室より	

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守ン進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セんと欲ン 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎賛助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

本多 日 生

孝子御書

御親父御逝去の由風聞真にてや候らん、貴邊と大夫志の御事は、末法に入つて生を邊土に受け、法華の大法を御信用候へば、惡鬼定めて國主と父母等の御身に入りかはり、怨をなさん事疑ひなかるべきところ、案に違ふ事なく親父より度々の御勸當を蒙らせ給ひしかども、兄弟ともに淨藏、淨眼の後身歟、將又藥王、藥上の御計らひ歟の故に、ついに事ゆゑなく親父の御勸氣を許りさせ給ひて、前

にたて参らせし御孝養心に任せ給ひぬるは、豈に孝子にあらずや。(續別遣文錄) 一八二九

これは池上殿に送られた御書であります、ズツと前にお話した池上殿の御兄弟が、どつちか法華經の信仰をやめれば、その方に家督を相続させるといふことで、お父さんは念佛であつたから、兄弟が法華經の信心をする事を嫌つて居つた。所が弟の嫁さんが少し信心が弱いものだから「信心などするよ

りは日蓮聖人から離れて家督を相續した方が良いでありますねか」といふので、弟の方を突ついでそこでもちよつと危なくなつたのを、日蓮聖人が「兄弟抄」といふ御書をお書きになつて、どつちか信心をやめたならば親をも信者にするには出来ない、兄弟心を協せて正義を貫き通せば、親も必ず法華經に來るからと言つて日蓮聖人が勧められた。そこで弟も決心してその通りやられて、弟の女房も非常な熱心な信者になつた。所が今茲にお父さんが死なれたといふ知らせを受けたが、あの時あなたが信心を通して親を法華經の信者に導き入れたから、本當の孝行が貫き通せた譯であると言つて、その悦びを述べられたのであります。斯ういふ事は世の中に起り易いことであるが、茲にも書かれた通り淨眼、淨眼の二人の子供が心を協せて親を救ひ、又藥王、藥上の二人が心を協せて親を救ひしが如くに行かなければならぬ、何事でも心を協せてやれば成就するものである。

日眼女造立釋迦佛供養事

これは名高い御書で、四條金吾の奥方の日眼女に送られた御書であります。東方の善徳佛、中央の大日如來、十法華經の壽量品に云く、或は己身を説き或は他身を説く等云云。東方の善徳佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利、舍利弗等、大梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日天、月天、明星天、北斗七星、二十八宿、五星八星、八萬四千の無量の諸星、阿

修羅王、天神、地神、山神、海神、宅神、里神、一切世間の國々の主とある人、何れか教主釋尊ならざる、○○○神、八幡大菩薩も其の本地は教主釋尊なり、例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮ぶる影なり、釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり。例へば頭を振れば髪ゆるぐ、心働けば身動く、大風吹けば草木靜かならず、大地動けば大海騒がし、教主釋尊を動かさし奉れば揺がぬ草木やあるべき、騒がぬ水やあるべき(乃至)今教主釋尊を造立し奉れば、下女が太子をうめるが如し、國王尚ほ此の女を敬ひ給ふ、何に況や大臣已下をや。大梵天王、釋提桓因王、日月等此女人を守り給ふ、況や大少の神祇をや。(論道文錄)

これは四條金吾の奥さんがお釋迦様の像をお造りになつた時に送られたので、壽量品を引いて、一切の佛でも神様でも、皆お釋迦様から身を分けて働いてお居て居るのである、本佛は天に出て居るお月様のやうなものである、一切の佛菩薩等は水にうつる月のやうなもので、天月水月の關係に於て本佛と他の方とのことを見なければならぬ。それ故に本佛を忘れたならば一切のものが狂つてしまふ「大風吹けば草木靜かならず」で、お釋迦様を忘れるといふのは大地震があるやうなものである、家でも藏でも木でも草でも一切が動いてしまふ、佛法の大動亂といふものは本佛釋迦尊を忘るゝにあるのである。今あなたはお釋迦様を有難く思つてお造りになつたといふのは、丁度下女が太子を産むが如く、下女と雖も太子を産めば國王尚ほ之れを敬ふ、何に況や大臣已下をやで、釋尊を信するならば梵天、帝釋等諸天

善神はその行者を守る譯であるから、あなたが釋迦様を信することに依つて、諸天善神はあなたをお守りなさらんければならぬ譯になつて居る。此處が大事である、お釋迦様を忘れて鬼子母神様に行つてはいかぬのである、こんな事が法華宗で判らぬやうでは仕方がない。私等は十歳ぐらゐの子供の時分にちやんと知つて居つた、讀んだら判るぢやないか。お釋迦様は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮ぶる影なり。それが判らなくては一つも法華經の有難い所は出て來はしない。鬼子母神様が有難いとか、妙見様が有難いとか、そんな事を法華宗でいうては駄目ぢや、鬼子母神といふやうなものは婆羅門の神様で、人の兒を奪つて食つた鬼婆である、唯だ法華經に來て改心したといふことはあるけれども、それはどういふ點で改心したかといふと、法華經を弘める坊さんを守るといふ誓ひを立てたので、病人を守るといふことは言はない。それで陀羅尼の中にも病氣平癒の陀羅尼と、法を弘める者を保護する陀羅尼とがある、法華經の陀羅尼品といふものは病氣所禱の陀羅尼ではない、鬼子母神はさういふ方の神様ではない。「寧ろ我が頭上、莫惱於法師」若し自分の頭の上にあつても坊さんを傷けるなど書いてある「寧ろ我が頭上にあつても法師を惱ますこと莫れ」自分の頭の上にあつても坊さんを傷けるなど書いてある「寧ろ我が頭上にあつても法師を惱ますこと莫れ」その者の頭をぶち破るぞといふ事になつて居る。だから鬼子母神は吾々の味方である、法華經を宣傳して居る吾々の爲には、鬼子母神の頭を踏んでも「ヤ演説御苦勞」と言はれるけれども、「病氣を癒して下さい、デビッド」そんな事は駄目である、それでも構はぬといふ

ことになれば、筋も何も立たぬ「寧ろ我が頭上、莫惱於法師」とやつて居るから、誤魔化しが利くけれども「寧ろ我が頭上にも法師を惱すこと莫れ」といふ風に讀んだならば、何の事だか判らぬ、病人の前で法師を惱すこと莫れと言つた所が、御祈禱にも何もなりはせぬぢやないか。無教育の者を對手にして誤魔化してやれる間はよいけれども、段々お經も讀めるやうになり、文字も判るやうになれば「法師を惱すこと莫れ」位は判つて來る、さういふ者を對手にする時に於ては、今迄のやうな無知識な宗教状態では法華經は駄目である。だからあらゆる宗教に於て信じて居る人格者の中で、一番善いものを持つて來なければならぬ、鬼子母神様と阿彌陀様と較べたりするとこつちが負けてしまふ、妙見様でも駄目ぢや、妙見菩薩ナンといふものは法華經の中にもなければ、一切經の中にもない風來菩薩である。それを捉へて最上位經王菩薩といふやうなことを言つて居るが、それでは正一位稻荷大明神に敵はぬことになる、餘程法華宗は今日愚かな事をやつて居る。私は唯だそんな小さい事を攻撃しようと思ふのではないが、本佛を絶對と信ずる方に議論無しに進むやうにしないと、今後の思想の闘ひに於ては日蓮主義の立場が無くなつてしまふ、唯だ我慢や我慢で「法華が善い、法華が善い」と言つて居るのでは、筋が少しも立たなくなるから、どうぞこの『日眼女釋迦佛供養抄』にあるやうな意味を明かにして、日蓮主義を發揚するやうに致したいと考へるのであります。

日蓮宗概観 (其九)

故 梶 木 顯 正

(二) 正像末三時弘教判

釋迦如來が出世し給ふてより後の「時」と言ふものを、先づ三つに分ける教の弘め方である。其の三時とは一つには「正法千年の時代」二には「像法千年の時代」三には「末法萬年の時代」といふ。さうして此の三つの時代に合した處の佛法を知つて弘めるのでなくてはならぬ、と聖人は誡告し給ふのである。其處で聖人は教行證御書に

正法には教・行・證(音)の三つ俱に愛備せり、像法には教・行のみ有て證なし。今末法に入ては、教のみ有て行・證なく、在世結縁の者(在

法・像法の二千年の中に於て、已に成佛の果報を遂げ終つて了つて、今末法には(下種を受け)一人も残つてゐない事を力説し給ひ「拙い哉、諸宗の學者、法華經の下種を忘れ三五塵點之昔(三千塵點劫五百點劫とて昔の遠い事を)を知らず、純國の妙經を捨て亦生死の苦海に沈ん事よ」と、時を知らざる諸宗の姿を教かれ

一、大 小 判

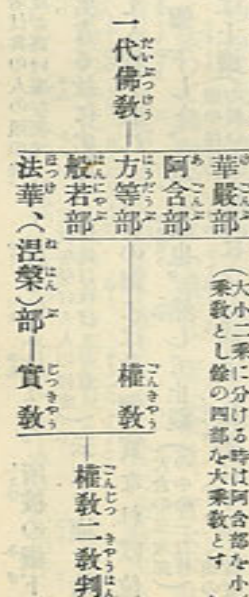
一代佛敎の内容を調べて見ると、浅い教あり深い教がある。そこで先づ全佛敎を二つに分けて、浅い方を小乘敎と呼び、深い方を大乘敎と云ふ。先づこの二つの分け方に依つて廣大なる五千〇四十八卷の經典を大別して、更に其れを細かく分け、斯の如くして其の中の尤も深い教を探つて衆生濟度の本願を達しやうとするのである。是れを古來法華宗では、「從淺至深」の相貌と云ふ。(小乘とか大乘とか云ふ乗字と同義で、「淺の岸から深の岸の間に」衆生を乗せて渡す」と云ふ意である)

結縁者とは如來御在世の時親しく如來より化導を受けて成佛の因縁を結んだ者の謂ひなり(一人も(今末法には)無し、權實の二機悉く失せり(權實の二機失せり大乘敎等に依つて已に化導を受けた者は前の正法像法の時代に佛果を已に得て了つて今末法の時代には全く無くなつて了つて居るひなり)此時(末法)は濁惡たる當世の逆誘(惡世にして住む人は五逆を行ふやうな惡人、正法正義を誹謗する如)の二(種)き邪人斗りの盛んな時なりとの如來の言に従つて云ふ)の二(種)人に、初て本門の肝心壽量品の南無妙法蓮華經を以て下種(後に成佛の種まき)と爲す。(法華經に)是の好き良藥を今留めて此に在り、汝取て服す可し差じと憂ること勿れとは是也。

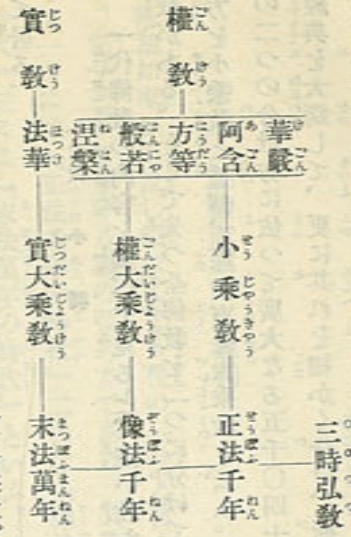
今我が法華經は、この大小二乘の内では何れかと云ふに、大乘敎の中の根本經、帝王經であつて、之れは敢て法華宗なるが故に我田引水で言ふのではなく、如來の金口已に斯の如く斷定し給ふたに據るのである。されば日本に於ては既に聖德太子が鎮護國家の妙典として、第一を法華經とし、左右に維摩、勝鬘の二經を置かれ、桓武天皇の時叡山の傳敎大師も亦斯の如くされた。

二、權 實 判

又日蓮宗では「權敎」「實敎」の二判を用ふる。之れは支那の天台智者大師が一代五十年の佛敎を五つに分けて見て居る處から來て居るので



(但し法華部の中は涅槃部を實教とし、餘の四部を權教とす。)
 斯の如く分けると同時に更に小乘・權大乘・實大
 乘とも分つ。



以上は皆我が日蓮宗の一往、教法の淺深勝劣を見
 る見方として用ふる判釋である。而して日蓮聖人は
 之等の教相判釋に依つて立正觀抄に

所被の機上機なる故に(教を受ける人の頭の程)勝る
 と云は(云ふ)實(教)を捨て、權(教)を取れ、天台
 (大師)云く、教彌權なれば位彌高し(權教に依つ

さかへプリンでは毫らぬ、何うしても特別上等の高
 貴業でなければならぬ、と同様に、頭の優い者な
 らば少々教が劣くてもそれで立派に仕上るが、反對
 に頭の悪い者には上等の完全な教でなければ立派に
 成ると云ふ事は六づかしい。其處で今末法の人程
 度を調べて見ると「顛倒の衆生」と言つて、皆一樣
 に頭が悪い、前にも言はるゝが如く「逆誘」と云ふ
 二種の人間計りて充ちて居る。時代がさう云ふ廻り
 合せに成つて居る「濁世」だと、如來は自ら説き置
 かせ給ふたのである。其の證據には世間の事にして
 も、佛敎の事にして、必ず正義を主張する者には
 三類(魯末、道門、僧等)の強敵が有る、のみならず之れに
 賛成する者が無い位であると明さる。日蓮聖人は又
 仰せられた。
 天台大師は靈山の聽衆として如來出世の本懐を
 宣べたまふと雖も、時至らざるが故に、妙法の名
 字も替へて止觀と號す、進化の衆なるが故に(聖人

者は其の人の頭の程)と釋し給ふ故なり。所被の機下
 度が高い事を表す。と釋し給ふ故なり。所被の機下
 劣なる故に劣ると(教を受ければ人の意)云はく權を捨
 て、實を取れ、天台の釋には教彌實なれば位
 彌下しと、云ふ故也。然して止觀(天台の三大部)
 は上機(頭の低い人)の爲に之を説き、法華は下機(頭の
 低い人)の爲に之を説くと云はく、止觀は法華に劣る
 故に機を高く説くと聞へたり、實にさもや有るら
 む。

と、説かる。此の文の中で何故頭の程度の高い者な
 ら實教を捨て、權教を取れ、若し下い者ならば、權
 教を捨て、實教を取れ、と云ふかといふに、天台大
 師は「高山の水は幽谷に下るの能あり」と云つて、
 一番低い谷へは一番高い山の水が下る能力を持つて
 居ると同じやうに、一番愚な程度の低い者を救ふに
 は一番立派な上等の教でなければ救ふ事が出来ない
 風邪を引いて頭が痛い、と云ふ位の程度ならへプリ
 ン丸でも癒るが、肺結核の大患だと、云ふのには、ま

は本化の人、天台大師(本化の付屬を弘め給はず、正直の
 師は進化の人なり)本化の付屬を弘め給はず、正直の
 妙法を止觀と説きまざらさす故に、有りのままの
 妙法ならざれば帶權の法に似たり(即ち實教の妙法な
 故に權教を混た妙)故に知んぬ天台弘通の所化の機は
 在世帶權の圓機の如きなり。(丁度天台大師に依つて教
 在世の時、小乘大乘四教實教と色々な教を説いて導かれた人達
 と同様に、まぜこぜの教を以て導かれた人達である、との意)
 今本化弘通の所化の機は法華本門の直機也(今末法
 本化の日蓮が弘通する相手の衆生は全部法華經本
 門に依つてのみ救はる衆生であり人違斗りなり意)
 と、復た天台大師は「最高の教は劣機を救ふ」とも
 釋して、最悪下劣の衆生を救ふ教へは、如來の究竟
 極説たる法華經を以つてすべき事を説かれて居る。

三、本 迹 判

始めに大小判を以つて一代佛敎を分け、次に權實
 判に依つて佛敎の中に小乘教、權大乘教、實大乘教
 の有る事を見、更に細より微に入つて實大乘教たる
 法華經の中に本迹二教の有る事を見んとするのであ
 る。それがこの本迹二教判である。聖人は治病抄に

法華經に又二教あり、所謂遮門と本門となり、本
 迹の相違は水火天地の違目也。
 例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり、
 ……今本門と遮門とは教主已に久始の變り目(久始
 の變り目とは、本門の教主は久遠の導師、遮
 門の教主は印度南國の始成の導師なれば云ふ)百歳の翁と一
 歳の幼子の如し、弟子又水火也……本迹を混合す
 れば水火を辨へざる者也。
 と、法華本迹二門の相違の天地雲泥せる事を宜明さ
 れて居る。

法華經八卷廿八品

前半十四品—遮門—理の一念
 三千を明す
 後半十四品—本門—事の一念
 三千を明す

かう法華經一部八卷廿八品を二つに分けて見ると
 前半十四品の遮門と云ふ中には「理の一念三千」と
 云ふ哲學の方面(即ち宇宙の實相と)即ち専門語で云へば
 佛性論(朱釋保)を説明したもの、後の十四品の本門

思想の三網格

橋本辰居



序論

宗教乃至思想が、國家社會に重大なる影響を與ふ
 ることは論無き所である。今思想を裁くに當り最も
 大切なる三つの網格、即ち超人觀、人身觀、宇宙觀
 の三點より之を論じて見たいと思ふ。

超人觀

人間本然の姿に於ては、吾人を超越する絶對の人
 格者を認め、之に對して禮拜崇敬乃至憧憬渴仰する
 ものである。かゝる超人格を否認する思想が二つあ
 る。一は儒教であり、他は西洋近世の唯物思想であ
 る。

儒教は、孔夫子の始めに於ては、天を一種の人格

的に認めて、之を崇敬し、有情のものとしたのであ
 るが、後に佛教に反抗せんが爲めに、著しく唯物的
 偏狭な學問となつてしまつた、朱子學の如き則ちこ
 れである。

歐洲近世の唯物思想も同様に、中世ローマ教會の
 羈束より脱せんとする努力は、遂に神をも追ひ拂つ
 てしまつたのである。神無き社會は冷やかである、
 人間は情に動く、かゝる冷たさには堪へ得るもので
 はない。そこで熱情は劣情となつて、肉慾的・享樂
 的方面へと向けられた。唯物論が享樂主義と同一視
 さるゝことを不當とする唯物論者も、事實の前には
 一言半句の辯解の餘地はあるまい。

勿論儒教と西洋の唯物論とは少しく異なる。即ち前者は人間の本性を善とし、後者は悪とする。この差異は極めて重大で、諸説紛々として諍つて居るが、法華經は明答を與へて居る。それは次の人身觀の項に於て詳論したい。但だ爰に一言すべきは、如何に儒教が、性善説をとり、享樂主義より離るゝとしても、超人格を確認せざる限り、羽毛の如き近代西洋思想の一觸に値つて、肯なく崩されて居るのである。このことは、明治大正の思想史を一見すれば明白であつて、誠に宗教信仰なき倫理道德は彩色に膠のなきが如きものである。

超人格を認むる思想としては、キリスト教及び佛敎を擧ぐれば足りる。キリスト教は唯一神敎にして信仰を熱烈ならしめ、崇高なる信念に導く所、恰もキリスト敎のみが宗教なるかの感と與へる程である。乍併唯一の神は、人間が他の神佛を禮拜することを欲しない排他的の神で、キリスト教徒の行く所、そこには必ず慘虐な殺戮が行はれて居る。

う。佛敎は中心を妙法華經に置き、妙法華經の中には如來壽量品をとることは、佛陀の金言である。これ敢て自分一個の小見ではない、先哲の幾多立證された試験濟の卓説なのである。故に如來壽量品に倚らざる佛敎觀、超人觀は一顧の値だもないと斷定される。是によれば、佛敎は統一神敎である、所謂開顯主義、統一主義、包容的中心主義の明敎である。一は萬と顯はれ、萬は一に歸し、その中心は應身常住として時間的にも空間的にも一切衆生救濟の御手が伸べられて居るのである。洵に本佛は天の一月であり、諸佛・諸天・大小の神祇等は諸水に映る影である。この本佛の絶對性、永遠性、實在性が顯現了知する時始めて私共は法悦に住し安心することが出来る。本佛の常住實在、十界互具が示されない時は、宇宙觀もこはれてしまひ、人間の正しき本質も顯れず、向上の希望も、犠牲の願行も悉く失ふに到るであらう

人身觀

人間の本質は一體何であらうか、或は本來善とい

唯一神敎は、人間を二元論に追ひやる。二元論は人間を果しなき矛盾に悩ませる。所詮眞理の基礎を有しない信仰は、遂には眞正の信仰ではあり得ないのである。この點特に近代教育をうけた我が青壯年の人達に強調反省を促がすものである。

そこで佛敎の超人觀は如何？ 人或は汎神論といふであらう、或は多神敎、或は一神敎といふであらう。さういふ論説も立つてあらうが、茲に注意すべきは、思想を論ずるに當つては、その大綱骨髄を把握し、細目はそれに依つて秩序づけられつゝ理解されるべきことである。纒かに思想の一部だけを擷んで論ずるは、意味をなさない誤謬の因である、何となれば如何なる思想と雖も、全然惡いといふものは無く、又如何に立派な敎だとして、その中に含まるゝ一部の思想が、或る時代、或る國家に全く妥當するとは限らないからである。かの泥棒にも三分の利ありといふではないか、そこで宜敷く綜合大觀することと依つてのみ思想の善惡取捨は決せらるべきであら

ひ、或は本來善といふ。而かもこの差異は極めて重大であつて、自由主義といひ、社會主義といふも、總て之等は人間の本質に關する見方の相異によるのである。キリスト敎の如く原罪を説き、人間は永遠に神たり得ずとするときは、結局オツペンハイマー氏のいふが如く、人間には食欲と性慾との二つきりなことになる。自己の慾望を満足さす、これが人間本然の姿である、利他心といひ、博愛といふも、それは自分の爲めになるが故に、社會に盡すのであつて即ち『熟慮せる利己心』に過ぎない。各人は出来るだけ金をもうけるがよい、社會は見ざる手によつて導かれ結局調和ある姿を呈するのだからと、かくして自由主義が生れる、世の中は脩羅闘争の巷とならざるを得ない。共產主義者は人間の本质に關して『社會の爲めに盡す』本能あることを教へる、これ自由主義に先んずること一步であると謂へよう。乍併依然として食欲と性慾とを基本的本能としてをすることに變りはない。神を頑強に否認するが故に『

會の爲めに盡す』本能といふは甚しい僞瞞でなからうか。社會を個人以上に見て居るが、社會を形成するは何ものなんであるかを深思すべきである、畢竟するに白人の人身觀は無明緣起である、だから人間は本質として調諍と破壊とを繰返すことゝなるに到る。これを鎮め、之を導くには佛教の人身觀によるが第一である、儒教も亦性善説を採るが、信仰なき思想の脆弱性は前述の如くであり、加之女子と小人とは養ひ難しなどと説き、その性善説は限られて甚だ淺薄である。一般世間の人は極めて表面的で、物事を深くほり下げる丈けの果報を持たぬから、宗教でも淺薄なものが歓迎され、學問でも短見に功利を眺望する輩が多い。基礎をかためずに早く家を建てようとする類である。

法華經では、法性緣起といふことを説いて、人格の實在を明かし、決して邪惡迷妄の者が次第に向上するのでなく、法性其の儘に緣起して活動を起し居る佛陀がある。この光明の方面の實在を高調し

から、それを活かして行くといふのが、即ち妙法華經の人身觀の理想である。

嗚呼二乗作佛、十界互具、咽喉も破れよとばかり大聲叫喚すれど、應ずるは唯木魚のみ。

宇宙觀

法界觀ともいふが、その主眼とする所は、實在の佛陀と、吾人が具有せる光明的存在との此二點を中心と定め、此の佛陀と佛性との自然的關係と、精神的關係とを以て宇宙觀の極處に置く、されば宇宙觀は前二者に比して第二次的意義を有するに過ぎないかに見える。乍併私共は宇宙觀に於て因果の大法を知り、人間を知り、信仰の對象を知るのである。宇宙觀の相異に依て超人觀も、人身觀も變つて來る。

この三者は相互に影響しあひ交渉しあふのであつて終極に於て分つべからざるものである。考へる中心を信仰の對象に置か、人間の性質に置か、或は兩者の關係に置くかに従つて超人觀・人身觀・宇宙觀と分れて來る。この意味の宇宙觀は超人格を認めぬ

其處に眞正なる超人格の實在を眞理の基礎から説明し、その實在の佛陀は、大智大悲を以て活動して居るものである。宇宙の法そのものが人格となり佛陀となつて活動して居ることになる、それが法性緣起とも佛界緣起ともいふ、この法性緣起を説くが爲めに、一切衆生悉く皆佛性あることの自覺を教へて居る。されば超人觀にして確立せずんば、人身觀も亦徹底し得ない、それで以て危險思想を指導せんとするなどは、思はざるも甚だしいと謂はざる可らずであるまい歟。日蓮上人は『千尋の底の石にも火あり』と仰せられて、海底深く沈んで居る所の石でも、之を取り出して敲けば火が出る、人も同様にいかに罪惡の淵に沈んで居ても、それを取り出して啓發の縁を與ふれば必ず佛性を啓發し得るものである。聖徳太子の憲法第二にも『人尤惡なるは鮮なし、能く教ふれば乃ち化す、其れ三寶に歸せずんば何を以て枉るを直さん』とある。いかなる失望落膽の中にあるものでも、その本質に佛性の火を有たぬものはない

近世西洋思想及び基督教に於ては、認識論の形で表はれて居る、人間は感官に訴ふる所のもの以外は分らぬといふ。

生前を知らず焉んぞ死後を論ず可けんやといふ、これが人身觀の相異に依り、性惡説をとる西洋では個人主義として表はれる。五尺の肉體、これこそ存在である、神や普遍意思は遂にあり得ない、國家社會はこの個人の集りに過ぎないのであつて、個人が根本であり、基本である。全體の爲めに個人を犠牲にすることは本末顛倒なりといふ。又學門研究に於ては、自然科学的方法のみを絶對の眞理とし、凡有ものをずた／＼に切りさいなまずんば止まざるやに見える。

科學的方法とは、畢竟現象世界の中より最も典型的なるものを選び出し、それを更に細分して、その一部を試験管に入れ硫酸を加へ、加熱し、漸くにして知り得た知識なのであつて、かゝるさゝやかなる知識は大宇宙の一微塵に過ぎぬ。三千大千世界に徧

満する真理の僅少なる知識の一面を捉へたる知識は之を以て一部の真理となすはよいとしても、それで全面の真理となすときは直ちに非真理となる。

性善説をとる儒教では、修身齊家治國平天下となる。前述せる如く、儒教は元來不完全乍ら超人格を認むるものなのである。佛教を毛嫌ひする餘り唯物論となり、神佛を拜むことを卑しむに到つたのである。徳川時代の儒者は、山崎闇斎が神明を拜むのを見て彼奴は墮落したといつて輕蔑したといふ。現在日本精神などを唱へて排他を得々として居る儒者神官はよく／＼このことを考へて頂きたいものである。凡そ天地三寶の恩惠無くんば、どうして國家のみ獨り榮え得やうぞ！ 超人格を認むるキリスト教は、超人觀は唯一神であり、人身觀は人間惡を説くが故に二元論に陥る。神は全く善であり、人間は全く惡である。一は一にして二に非らず、二は二にして一に非らず、勝は勝にして負に非らず、富むことは決して貧しくなる事ではない。

るかと思へば、成る程末法白法隱沒時代なる哉と、つく／＼感ぜしめられる。諸法實相、十界互具、一念三千等無價の寶珠は徒らにうづもれて居る。

結 文

蓋世の英雄、榮華を極めし貴人、果ては其日の糧にも事缺きし賤人等が、等しく眠る墓地に佇めば、或は「我此土安穩」の率塔婆あり、或は「是法住法位世間相當住」と書ける墓標あり、颯々の松籟は、常樂我淨と稱ふるが如く、遠寺の梵鐘は、佛教徒の無力を訴へてや諸行無常と響く。

佛教は今や墓地に迄追ひつめられて居るのであるまいか。率塔婆の經文は、堂閣こぼたれ、經典の焼き失はれたる時、これのみは消滅せじと書きつけ置くのであらうか。

子供に正宗の名刀を與へては、却て損傷を來たす思想の大きな藏は誰人が開く乎。噫、果して誰人が開く歟。

かくして世は調節を失つて果てしなき矛盾に悩むに到る。狂熱的信仰が國家を否定し、この世の臭あるもの、總べてを壓伏するかと思へば、惡魔的熱情を以て神を斥け、教會を壊ち淋しく笑ふのである。

社會の所得は一定であり、之を資本家、企業者及び勞働者の三者に分配する。故に資本家、企業者がより多くの分配を受くるときは、勞働者はより少く分配を受けるものとする。斯くしては人間は永遠に争ひ、苦しみ、悩まねばならないであらう。今迄だつて人間はどれ程苦しんで來たことであらう、か弱い人間が、どうしてこれ程苦しむことが出來たのであらう、この儘では人類は滅亡の他は無い。二元論は遂に佛教の心的一元論におき代へられねばならぬ。

乍併くても白人は、東洋の文明を省みやうとしない。白人は仕方ないとするも、肝心の日本人が、てんで問題にして呉れない、のみならず日蓮門下の僧俗さへもが、果してどれだけ理解し、信仰して居

書道は合理的健康法であります。私は過去三十年の體驗から、藝術と科學とに立脚する新時代に適應の

健康書道法

を提唱して居ります。場所も相手も要らず、一日僅か十分間で字が上達した上健康になります。お試し下さい。

個人教授、揮毫、講演、講習會等御希望の方は下記へ申込願います。

東京市淺草區聖天横丁二七

吉川郁子方

夏 谷 江 南

題目寸言抄

一八

林 郁 夫

◎日蓮上人の宗教は、いふ迄もなく題目の宗教である。勿論、その教相や観心には、獨特の尊さや深さがあるが、上人の宗教のつゞまる處は、七字の題目にある。一意専心に唱へ出される題目こそ、日蓮上人の宗教の極點である。

◎私は題目にどんな力が籠められてゐるのかわからない。又、強いて知らうとも望まない。しかし苦しい時や、楽しい時や、乃至思案に餘つた時など、心の奥底から或る塊かたまりがこみ上げて来て、思はず唱へる題目には、何か神秘的の偉力を感ぜずには居られない。

◎良寛和尚の嫌ひ三つ。曰く詩人の詩。曰く書家の書。曰く料理人の料理。小生の嫌ひなもの三つ。曰く理詰めの題目。曰く功利的題目。曰く思ひあつた題目。

◎題目は、日蓮上人以來數百年の間、唱へ通されて來た。古いことである。この古さは、古臭いと云つて捨てらるべきでない。歴史を通じた古さには、親しみさへある。まして題目の精神の、永久に清新なるに於ておやである。

◎時代に取り残されたやうな寺の一隅で、將に世を終らうとしつゝある老人連の唱へる題目は、如何にも時代錯誤である。だが、これは唱へる氣持が時代錯誤なので、題目までがそらだと云ふのではあるまい。時代と共に生き、時代と共に唱へる題目が、どうして時代錯誤にならう。題目は、永遠に不滅である。

◎題目の功力を先づ知つて後の唱題ではない。唱題の後に初めて實感する題目の功力なのである。

◎人の性格はまち／＼である。性格によつて題目のとなへ心こころもまち／＼になる。私はしんみりした氣持で唱題したい。景氣のいい題目、思ひあがつた題目などはいやである。しんみりした氣持とは、沈鬱しんぷくに似て決して沈鬱ではない。しんみりと、つゞましく底力ある唱題する時、私は眞の宗教を感じるのである。

◎日蓮上人が、親しく口づから唱へなされた題目を、今、自分も同じく唱へてゐるのかと思へば、肅然たらざるを得ないのではないか。

◎花に鳴く鶯、水に住む蛙かはす、その聲や、皆、一つである。なんと饒舌な人間であらう。他の生物にならつて、人間の聲も一つにするとしたら――。私は言下げんかに答へる、七字の題目と。題目は人間の聲であつて欲しい。

◎古聖曰く「夫れ娑婆の教體、音聲、佛事を作す五種の中、勤め易く、濁世の中、要とす」と。これなる哉。これなる哉。

◎唱へるつもりで唱へる題目もよい。が、唱へる氣もなくて、ひとり出て來る題目も亦よい。題目に親しみ切れれば、尋常茶飯事にヒョイ／＼出て來

る。唱題の生活化とも云ふべきか。

◎細雨の降る日など整居のつれづれに、自分の地上に生きてゐる姿を、しみじみ感じることもある。

この心のしじまに、聽てこみ上げて来るものは矢張り題目である。

◎聚雨沛然、矢張り題目である。

◎古書に曰く「夫れ七字の中、法界を牢籠し、天地を斡旋し、六度を包括し、萬行を收攝す。妄情を蕩かさずして、妙に性本に復し、一步を移さずして直に寶渚に至る。昭々焉たり。赫々焉たり」と。

◎古人の首題の銘に曰く「一心の本源、諸佛こゝに出づ。萬法の正體、衆生の歸する所」と。

◎至心に唱へらる可き題目である。

開目鈔講話

(第十一講)

小林一郎

この間は華嚴の方の學說といふものを一通り説かれました、その華嚴といふものは随分深いものだけども、まだ法華經の壽量品で打明けられた程の深さが無いといふことを言つて居られる所でありました。その華嚴の方では「十玄六相」といふやうなことを申すのであります。これは今日蓮上人の教義を説きます上に於て、そんなことに深入りしなくても、宜いやうにも思ひますけれども、これはこれで又一種の見方がありますので、極く簡單にこの「十玄」といふこと「六相」といふことを申上げて見ようと

延山偶成 金子生

思親閣

曾自躋攀拜兩恩 後人感淚灑乾坤

吾來此處低徊久 猶憶祖師仁孝尊

登七面山

古木陰中行路艱 杖藜扶我此躋攀

天風浩々甚清爽 吹破白雲山外山

思ふ「玄」といふのは深く入つて見るといふ意味です。これは自然界の出來事でも、或は人生の出來事でも、吾々の目の前に現れて來る色々な事柄を觀察し、又解釋する上に於て、唯目の前に現れただけを見ないでもう少し深入りして見る。どういふ風に深入りして見るかといふことに付ての眼の着け所であります。斯ういふことを十分に分けまして、これを「十玄」と申します。

- 一、同時具足相照門
- 二、廣狹自在無礙門

三、一多相容不同門
 四、諸法相即自在門
 五、隱密顯了俱成門
 六、微細相容安立門
 七、因陀羅網法界門
 八、託事顯法生解門
 九、十世隔法異生門
 十、主伴圓明具足門

先づ第一に「同時具足相照門」斯ういふことを申します「同時に具足する」といふことは、今日の前に現れた一つの事柄を見て、未だ現れざる一切の働きがその現れたことの中に、自ら具つて居るといふことを知るのであります。斯ういふことを言つては餘り抽象的のことになりますから、實例を以て申しますと、例へば朝顔の芽が出る。芽が出た時に、その芽が伸びれば茲に葉が出来て、それから花が咲くのだといふことを知るのです。それが「同時具足」で

行くとき大きな事になる。例へば法華經の方便品、譬喻品などを見ると、さういふことがあります。チョット佛様の前へ行つて頭を一つ下げた、それが縁でそれから段々功德を積むならば總て大乘の教をも信ずるやうになるだらうといふやうな事、子供が戯れに砂の上に指で以て佛様の御姿を描いた、それが縁になつて、それをモット深めて行けば結局大きな悟を開くのだといふことが言つてあります。さういふ意味であります。今茲に現れたこの心の中に、非常に深いものが含まれて居るのだといふことを能く見るといふ、その見方です。それが「同時具足相照門」相照といふのは、今の目の前の事と將來の事と相照して、さうして大きな結果を生ずるといふことを知るのであります。

それからその次は「廣狹自在無礙門」廣といふのは物の一般的の方面、狹といふのは特殊の方面、一般的の物の中に特殊の性質が自ら具つて居る、又

す。今日の前に見えたものに依つて、また現れないものまで考へる。そこに現れた小さい子供を見るとこの子供は大きくなつて總て世の中で立派な働きをする者だといふことを、今日の前に見えるその子供の姿の中に見て取る。斯ういふことであります。佛道に歸依すれば、この歸依する心持が本になつて菩薩の行も積めるだらう、結局は佛の境界にも達することが出来るだらうといふやうに、もの、現れた所に於て、また現れない將來發展すべき性質が、そこに具つて居るといふことを見て取る。これが同時具足といふことである。これは非常に大事なことでもあります。何でも初めはそんなに大きい事は出来るものではありませんから、チョット小さく現れた事には大きな結果が伴ふのだといふことを能く知つてさうして小さい事を助けて、これを伸ばして行くやうに心掛けなければなりません。だからチョットでも佛道に縁があれば、その縁を辿つて、その縁を助けて

特殊の一つの物を見ても、それに共通なものが解る。その兩方が解りました所が廣狹自在といふのであります。これも唯ソソナ理窟を言つて居るのであります。解りませぬが、例へば櫻の花、桃の花、菊の花はそれ／＼別個の物でありますが、その櫻の花、桃の花、菊の花には、花としての性質は一緒に具つて居る。それは花瓣は違ふだらうし、色も違ふし、咲く季節も違ふが、花である以上は花としての性質は皆具つて居る。だから本當に總ての花を見てから、又モウ一遍櫻の花を見直す。櫻の花一つ見たところから花の本當の性質は解らぬ。それは櫻の花ばかり見て居るのでは解らない。色々な花を見てからモウ一遍櫻の花を見ると、櫻の花一つを見て「ア、花といふものは斯ういふものだナ」といふことが解る。それが廣狹自在です。人生の事が本當に解つて見ると、どの地位に居る人、どの職業をする人、ドンナ仕事をする人でも、皆人間としての尊さが現れて来る。

廣く眼を開いて然る後に狭い一部分を見ると、一部分の中に廣い意味が見えて来る。これが廣狭自在といふことであります。これは吾々が世の中に立つ上にて非常に大事なことであります。人生を本當に徹底的に見た人は、ドンナ小さい事實でも、ドンナつまらない事實でも皆これは値打がある、皆これは世の中の役に立つのだといふことが解る。狭い所ばかりを見て居ると互ひに衝突してしまつて、百姓は米の高いことを望むし、月給取は米の安くなることを望むといふやうな譯で、皆自分の立場に囚はれる。それを廣く世の中を見てからモウ一遍見直すと、狭い一つ／＼のものが皆値打を有つて居る。皆それは大きな人生の發展を助けて行く、斯ういふやうに考へられる。さういふやうに見るのが廣狭自在であります。廣い所を見た後に狭い所を見て、狭い所に廣い意味が現れて行くのであります。さうすれば無礙であります、その間に礙りはない。小さい

に一貫して居る一つの物がある。一つの物の中に皆違ひがある。兩方相俟つて初めて總ての物が存在する。これが「一多相容」であります。一つと多くとが相容れるといふのは、兩方とも必要である。違ふといふことも必要である。同じだといふことも必要である。斯ういふことであります。そこを能く見て行きますと、それ／＼の物が皆値打を有つて来るのだ。これは何時か申上げたと思ふが、親が子供を育てる場合に一番よく現れる。五人の子供があれば五人の子供が皆可愛いといふことは一つでありますけれども、五人の子供に同じ着物を着せて同じ物を食べさせる譯には行かない。大きい子供には大きい着物を着せて、牛肉でも鰻でも食べさせる。生れたばかりの子供には小さい着物を着せて乳を吞ませる。そこは違ふ。それは同じ慈悲を以て同じやうに可愛がるが、その取扱方はそれ／＼違ふ。その違ふのが平等の慈悲を全うする途なのであります。何でも

事ばかり見て居ると皆囚はれてしまつて、お互ひが小さいものを固執して行きますから、その思想といふものは通じないのであります。そこを一つ見直して行くといふことが「廣狭自在無礙門」といふことであります。

それから第三には「一多相容不同門」一多といふのは一つの事と多くの事、一つの事の中に多くの物があつて發展すべき性質を認める。それから多くの物の中にそれを一貫して居る一つの事を見て取る、斯ういふことであります。これは言換れば差別と平等の關係です。これは非常に大事であります。例へば人間の顔付といへば、上に目があつて真中に鼻があつて下に口があるといふことは同一であります。皆誰でもさうなのだけれども、違ひを言へば皆顔付が違ふ。同じ顔をして居る人が幾人もあつては、往來で會つて挨拶も出来ないが、皆違ふ。一つと言へば一つ、併し違ふと言へば皆違ふ。併しその違ふ中

面倒臭いから皆同じ鰻を食へさせて置かうといふので、生れたばかりの小さい子供に鰻などを食へさせれば腹を下してしまふ。それだから違つた取扱をする。それが平等の慈悲を全うする途です。人間は皆さうです。違ふといふことの中に平等の一つの思想が現れなければ何にもならない。それが「一多相容」一つの事の中に多くの物が現れる、又多くの物の中に一貫した一つの物を認める。さうして「不同」といふのは、その場合、その場合が宜しきを得ることであります。宜しきを得なければいかぬ。小さい子供を取扱ふ時には小さい子供らしく取扱ふ。大きい子供を取扱ふ時には大きい子供に適當してやる。それが不同である。皆宜しきを得なければならぬ。それを型に執はれてものを考へるやうなことでは本當のことは出来ません。總て世の中の事をさういふ風にして見て行かう。差別と平等との關係を本當に健全に見て行かう。斯ういふことが「一多相容不同」

といふ見方であります。

それからその次は「諸法相即自在門」諸法といふのは様々な事柄といふ意味です。法といふのは事柄を言ふ、その様々な事柄は「相即」といふのは離れない。この「即」の字は非常に大事なことであります。これは離れないといふ意味であります。チョツト目の前を見ると色々な違つた物があるけれども、その違つた物はマルデ違ふのではなくて續きだ。斯ういふことを見るのが、諸法相即です。これは人生のことに付て言ひますと、善人と悪人といふのがさうです。善人と悪人と非常に違ふけれども、善人が少しづつ間違つて来ると悪人になつて来るのだし、悪人が少しづつ、心を直して行けば非常な善人になるので、所謂佛といつても、悪魔といつてもマルデ離れたものではない。悪魔が少しづつ善くなれば佛になるし佛が少しづつ悪くなれば悪魔まで落ちるのだからこれが所謂諸法相即です。これは非常に大事なこと

斯ういふ風に見て参ります。これが所謂諸法相即といふことであります。そこで自在を得るのだ、ドンナ者でも許してこれを相手にしてやるといふことが出来る。ドンナ善い者でもそれで足れりとしなない。モットしつかりやらなければならぬ、斯ういふことになる。融通が利くのであります。斯ういふ心持を以て一切に向ひますのが「諸法相即自在門」といふ事でありませう。これも亦人間が世に處する上に於ては必要な考でせう。

それから第五は「隱密顯了俱成門」隱密といふのは隠れて現れない物、顯了といふのは表に表れた物、隠れた物は人が認めない、表に現れた物は人が認める。けれども隠れた物がなければ表に現れた物は力が無い。だから隠れた物と現れた物と相俟つて初めて本當の働きをするのだといふことを見究める、これが「隱密顯了俱成門」です。是はモウ直ぐ見ても判る事です。例へば斯ういふやうな建物の壁は漆喰

であります。幾度も同じやうな譬へを申すやうであります。例へば水を熱したり冷したりして、百度になれば沸騰して蒸氣になり、零度になれば固まつて氷になる。氷と蒸氣と比べればマルデ違ふけれども、併し百度のお場を冷して九十度、八十度、七十度と段々下げて行つて零度になれば氷になるのだし零度の氷を温めて二度、三度、五度と高めて百度になれば蒸氣になるのだから、要するに蒸氣と氷は續きだ。その續きだといふことが所謂相即であります。愚な者と智慧のある者、それは相即で續きだ。愚な者が少しづつ進んで行けば大變な智者になり、智慧のある者がモシこれで澤山だと氣を許してしまへば愚な者になつて行く。一切のものは相即だ、續きだ。斯ういふことを見る。それだから佛はドンナ悪人だつて憎まない。今は悪人だけれども善くなれば佛になれる。ドンナ馬鹿な奴でも馬鹿にしない。今は馬鹿だけれども段々智慧を具へれば大變な智者になる

が塗つてあつて眞白です、これは大變綺麗だが、中まで眞白ではない。中は汚い泥が固まつて居る。その汚い泥の上に漆喰を塗つて綺麗になる。この中の隠れた泥をいゝ加減にして置いて、碌に乾きもしない上に漆喰を塗れば、一週間も経てば漆喰に龜裂がいつて落ちてしまふ。この白い壁を白い壁で置く爲には、蔭に隠れた泥がしつかりと固まつて居なければならぬ。世の中の事は皆さうです。現れた物が貴いか、隠れた物が賤しいか、ソナナことを考へてはいけない。隠れた物が本當に値打があるから、現れた物がそれの働きのする。併し又隠れた物ばかりではいけないので、表に現れた物がなければ語らない譯でありますから、現れた物と隠れた物とが共に互譲し相俟つて、さうして全體を成して行くのであります。斯ういふことを能く見て取るのであります。花が散るといふことは儂ないことだけれども、散つたら來年又咲くといふ順が立つのだから、さう

して見れば散つて行くといふことが、あとの花を咲かせる途である。斯う思ふと散ることもやはり善いことになつて行く。木の葉が散るといふことは悲しいことだけれども、今年（ことし）の木（こ）の落（お）ちが散るから又（また）来年（らいねん）新しく芽（め）が出る（で）るのだから、さうすると散るといふことは芽（め）の出るのを促（うなが）すことなのであつて、散るといふことはやはり値打（ちうち）のあることだ。斯ういふやうに考へて行くのであります。さうすると蔭（かげ）に隠れた事（こと）と表（あは）れて現れた事（こと）と、共に相俟（あひま）つて全體（ぜんたい）の調和（てうわ）を示し全體（ぜんたい）の美しい姿（すがた）を示して居るといふことに相成（あひな）ります。こゝを能く見て取る。これは自然界（ぜんぜんかい）に於ても同じでありまして、それが所謂（すゐ）隠密（いんみつ）顯了（けんりやう）了（りやう）であります。

それから第六は「微細（みこ）相容（あひま）安立（あんり）門（もん）」。微細（みこ）といふのは極（ごく）く小さい物（もの）です。極（ごく）く小さい物（もの）が互（あひ）ひに他（た）の力（ちから）と續（つ）き合（あ）つて、さうして大きな働（はたら）きをするのです。

「相容（あひま）」すなはち相容（あひま）れるといふのは續（つ）く意味（いみ）です。例（れい）へばこの机掛（きかけ）といふものが机掛（きかけ）を成（な）して居（ゐ）るのは

一本（いっぴん）々々（ざざ）の糸（いと）が集（あつ）つてこの机掛（きかけ）を成（な）すといふことでこの一本（いっぴん）の糸（いと）はどうでも宜（よ）い、この二本（にほん）の糸（いと）はどうでも宜（よ）いといつて、この糸（いと）をアツチでもコツチでも引（ひ）けば、この机掛（きかけ）は破（やぶ）れてしまふ。一本（いっぴん）づつの糸（いと）が皆（みな）机掛（きかけ）そのものを作（つく）つて居（ゐ）るのであつて、一本（いっぴん）の糸（いと）だといつて輕（かろ）んずべきものではない。天地（てんち）の間の事（こと）は皆（みな）さうでせう。小さい事（こと）が集（あつ）つて大きい事（こと）を成（な）す。小さな木（こ）の葉（は）一枚（まい）がつかまらなかつても、木の葉（は）が一枚（まい）々々（ざざ）集（あつ）まらなければ木（こ）の繁（さか）つた美（うつく）しさをつくりはしない。一滴（ひとしずく）の水（みづ）が小さいといつても、その一滴（ひとしずく）の水（みづ）が集（あつ）まらなければ大海（たいかい）の大きなものは出來（でき）ないのでありますから、微細（みこ）な物（もの）が互（あひ）ひに助（たす）け合（あ）つて、互（あひ）ひの力（ちから）を集（あつ）め合（あ）つて、さうして大きな物（もの）をつくるのだといふことを能く見究（みきゆう）めるのであります。それが「微細（みこ）相容（あひま）」さういふことを見究（みきゆう）めれば各々（おの／＼）が境遇（きんぐい）に安（やす）んずることが出來（でき）るのであります。何も高い地位（たいぢ）に居（ゐ）らなければならぬといふことはな

いドンナ地位（たいぢ）に居（ゐ）つても、自分（じぶん）達の力（ちから）が集（あつ）つて來（き）さへすれば大きなものになるのだと思（おも）へば、高い地位（たいぢ）を與（あた）へられたら高い地位（たいぢ）に安（やす）んじて居（ゐ）るし、低い地位（たいぢ）に居（ゐ）なければならぬならば、低い地位（たいぢ）でも安（やす）んじて居（ゐ）られる。金（かね）が儲（たか）つたら儲（たか）つたで、その金（かね）で世（よ）の中の役（やく）に立（た）つたら宜（よ）いが、金（かね）がなくなつてしまつて貧（ひん）しいなら、貧（ひん）しいなりに世（よ）の中の役（やく）に立（た）つて行くのだから、そこに安立（あんり）して行（い）ける。さういふのが、「微細（みこ）相容（あひま）」相容（あひま）れるといふのは互（あひ）ひに助（たす）け合（あ）ふ、力を添（そ）へ合（あ）つて全體（ぜんたい）の役（やく）に立（た）つ、斯（ごと）ういふ意味（いみ）であります。それだから佛道（ぶつだう）の研究（けんぐつ）に於てもサウなのであります。根本（こんぽん）精神（しん）を捉（とら）へなければならぬといふことも大事（だいじ）だが、一字（いち）一句（いっく）を捉（とら）へることも大事（だいじ）だ。この一字（いち）一句（いっく）を離（はな）れて根本（こんぽん）のものを据（たも）つていふとしても、それは出來（でき）ない。タツタ一字（いち）、タツタ一句（いっく）、この一字（いち）一句（いっく）の意味（いみ）が解（わか）つたことでも、これは尊（たか）いことでそれが集（あつ）つて全體（ぜんたい）の理（り）解（かい）といふことになるのであり

ますから、小さい事（こと）を輕（かろ）くしてはいけません。マア私（わたし）などは力（ちから）の無（な）い者（もの）ですが、斯（ごと）ういふ所（ところ）で皆（みな）様にコンナこととお話（わ）をするのはそれであつて、それは時々（ときどき）一時間（いちじかん）か二時間（にじかん）話（わ）したつてちぎれ／＼ですけれども、ちぎれ／＼に一字（いち）一句（いっく）を説明（せつめい）しないで全體（ぜんたい）を説明（せつめい）することが出來（でき）るか。それは出來（でき）やしない。やはり一つ／＼を善（よ）くしなければ全體（ぜんたい）が善（よ）くならぬ。さういふやうなことを考（かんが）へて、ドンナ小さい事（こと）でも、ドンナ一部分（いっぶぶん）の事（こと）でも、そこに大きな値打（ちうち）を認（たづ）めて行く。斯（ごと）ういふことが「微細（みこ）相容（あひま）」といふこととあります。マアそこが出來（でき）ますれば「安立（あんり）」ドンナ小さい事（こと）でもそこに安（やす）んじて行（い）ける。ドンナ小さい研究（けんぐつ）でもその研究（けんぐつ）に大變（だいへん）な値打（ちうち）を認（たづ）める。斯（ごと）ういふことになるのであります。

それから第七は「因陀羅（いんたら）網（あみ）法（ぽう）界（がい）門（もん）」。因陀羅（いんたら）網（あみ）といふのは帝釋（たいしやく）天（てん）の御殿（ごてん）の飾（かざ）りに美しい網（あみ）が張（は）つてある。その美しい網（あみ）は、その網（あみ）の結び目（むすぶめ）毎（まい）に美しい珠（たま）が着

いて居る。それは寶珠といつて寶石のやうなものでその珠と珠とが照し合つて全體が美しい、斯う言ふのであります。この珠と珠と照し合ふので網全體が非常に美しい光を發する。これを因陀羅網と言ふのであります。人間のこともその通りで、一人が善い行ひをする。亦一人が善い行ひをする。善い行ひと善い行ひとが照し合つて、自分が善い行ひをすれば人も善い行ひをするから、それを見て、「これではまだ足りないナ」と思つて勵んで行く。向ふも亦コツチの方の善い行ひを見て勵んで行く。お互ひの善と善と照し合つて益々その善を進め、益々その光を増して行くといふことは、丁度帝釋天の御殿の網の結び目にある珠が互ひに照し合つて、互ひに光を添へると同じだ。斯ういふやうに人生の事を見て行くのであります。ですから私共は自分で善い行ひを勵んで他の人を照らすやうな行ひをしなければならぬのであります。又他の人の善い行ひを見て、これに感

激して自分を勵ますといふこともしなければならぬのであつて、互ひの善い行ひと善い行ひとが相照して、さうして人生全體の光を添へる？人生全體の大きな意義を全うして行く。斯ういふやうに考へて参るのであります。これが因陀羅網法界門といふことであります。これも亦人間の世に立つ上に於ては極めて大事なことでせう。

それから第八は「託事顯法生解門」であります。「託事顯法」といふものは、事に託して法を顯はす。「事」とは世の中に現れて居る一つ一つの事柄であります。「法」といふのは本當の道です。「理」と言つても宜しうございます。法といふことは法と言はずに理と言つても宜い。事は即ち行ひです。行ひに依つて本當の理が現れるといふことが「託事顯法」といふことです。これは日蓮上人が始終そのことを言つて居らつしやる。「行學の二道をはげみ候べし、行學たえなば佛法はあるべからず」と仰しやつて實行し

なければいけない。併し實行しなければいけないと言つて、唯實行ばかりやつたつて、佛の道を學ぶといふことをしなければ、自分の行ひはトンデモない方に外れてしまふ。だから實行することも必要だけれども、學ぶことも必要だ。學んで實行する。實行して行けばまだ足りないから、まだ學ぶのだ。これは行と學と兩方でなければ本當の佛法でないといふことを言つて居らつしやるが、それと同じで、實行といふことに依つて本當の理が現れる。併しその理を現はすといふ心持がなくて、唯何でも實行さへすれば宜いといふことになる、淺薄になつてしまふ。チヨット餘計なことを言ふやうですが、この頃はどうか佛敎といふものが實生活を離れて居るといふ非難があるので、それではいけないと思つて、何でも實生活に役に立つのが佛敎だといふことばかりを言つて居つて、深い理を究めるといふ方面のことは要らないやうなことを言ふ人があるけれども、そ

れは間違ひなので、常に深く究めて行かなければ、實行といふものに深みがない譯でありますから、理を究めて實行する。又實行して見れば尙更深い理を究める必要があるので、理を究めることと實際に行ふことと相俟つて段々本當に善くなるのであります。昔の佛敎は實生活を離れて居た方面もありませうが、この頃は又實生活にくつゝかけて「ヤレ軍隊を慰問しなければならぬ」「滿洲に發展しなければならぬ」「地震があつた、義捐金を出すのだ」「洪水が出た、焚出しをするのだ」……ソナナ事ばかりをやつて居て、それが佛法の全體だと思つてはいかぬ。それも大事だが、それよりもモツト深いものがありはしないか、人生の本當の意義を究るといふことと、實際の生活に役に立つことと相俟つて行かなければ本當の信仰は出來ないのであります。餘り空論はいけないけれども、餘り實際的に引下してしまつたのでは敎といふものの深みがないでしょう。事に託し

て理を顯はす』唯事をやつて居てはいけない。その事をやつて居る間に本當に深い理といふものが現れて、益々深く信心をする、斯ういふことになつて参る譯です。さうすれば初めて解を生ずる。佛様の心持が本當に解るのだ。唯、理窟だけやつたのでは佛様の心持は解らない。唯慈善をするとか、世の中の善い事をするだけでは解らない。善い事をする、又一方に於て深い理を究める。この兩方相俵つて行けば、そこに初めて佛の教といふものが本當に解るのであります。これを偏らないやうにして行くこと、それが所謂事に託して法を顯はすといふことでありませう。

それから第九は『十世隔法異生門』であります。『十世』といふのは過去、現在、未來を所謂『三世』といひます。その三世が各々他の三世と連絡を有つて居りますから三と三と掛けて九になる。現在といつても現在にやはり過去と未來の關係がある。未來

は洵に短いものです。

過去

現在

未來

わかり易く圖に描いて見れば、斯ういふやうな長い命の中の一部、これが現在の命でせう。過去の命は非常に永いものです。現在の命は六十年か七十年で、百年となりはしない。未來の命はまた非常に永い。この過去、現在、未來の全體を見ると、この現在といふものは洵に短い、併しこれを離れて過去もなければ現在もないのである。だから今日の一日を大事にしなければならぬ。今日の一日はマア短いかれども、今日の一日は過去、未來に亘つての永い續きの一部分なのであるから、これを決して輕んずることは出来ない。異といふのはそれ／＼の段取りを能く見究めることであります。今日の一日が大事故だ。今日の一日をいゝ加減にして置いて、未來永遠のことばかり考へたつて仕様がな。今のこの一

といつてもやはり過去に現在と未來の關係がある。未來といつても、未來は過去と現在の續きだ。斯ういふやうに考へると、過去、現在、未來が各々三世の關係がありますので、三と三と掛けて九になる。併しその九つが別々ではない。それが皆連絡をして行くのでありますから、そこで三世と三世とで九になります。その外に『總世』といふものがある。スツカリの全體の纏りがなければならぬ。過去、現在、未來を統一した働きがなければならぬ。これを入れますと十になる。三世が相應して九つになり、その九つをスツカリ取纏めて行く性質がそこにありますから、合せて十になる。その『十世』といふものが皆通じて居るけれども、通じて居るからといつてその一つ／＼を輕んじてはいけない、それが所謂『異生』といふことです。異生といふことはそれ／＼の意義を認めることです。異つて生ずる。これは佛教の信仰に於ては非常に大事であります。今日の一日

時間が大事だ。今のこの一時間をいゝ加減にして永い未來のことを考へても空論になつて行く。だから過去から現在から未來にかけての永い命を感ずると共に、その一つ／＼の生活、一日々々の生活、一時間一時間の仕事に十分の力を認め、十分の値打を認めて行かう。異といふのはそれ／＼の値打を本當に認めて行かう。斯ういふ考へてあります。これも亦非常に大事な考へてせう。

それから第十には『主伴圓明具足門』といつて、『主』といふのは目の前に現はれて居る事柄の中心を成すものです。『伴』といふのはそれに伴つて来る周囲の事情です。チョット考へると中心を爲すものが大事で、それにくつゝいて來るものはどうでも宜いと思ふけれども、本當はさうではないのであつて、一つのもの一つのもの働きのするのには、周囲のものがこれを助けなければ出來ないことです。だから主なる者になるか、伴のものになるかといふことは値打

に於て變りはない。代る／＼に中心になつて行く。それを兩方とも認める。表に現れた派手なものも値打があるけれども、それに伴つて來る蔭に隠れたものも皆それ／＼値打がある。斯ういふことを考へなければならぬ。マアこの部屋で言へば、柱があつて、天井があつて、床があるといふことは主です、土台の石があつて、礎があるといふことは伴です、けれどもこの土台がグラ／＼して居た日には、この壁だつて、床だつて立ち行かないのでありますから壁が大事だ、床が大事だといふことを知るならば、この床を支へて行く土台の石が大事だといふことを知らなければならぬ。それが『主伴』です。表に現れた主なものばかり偉いのではない。それに伴つて隠れて居る、チツトモ認められないものも値打があるのだといふことを、兩方認めて行く、『圓明』といふのは兩方揃つてそれが明かである。さうするといふ『具足』で、スツカリ解る。そこがスツカリ解るのを

であります。斯ういふことを能く見究めて、有らゆるもの、尊さを知り、有らゆるもの、本當の値打を認めるといふことが『主伴圓明』といふことであります。そこが解りまして初めて『具足』總てのもの本當の性質が漏ることなく解つて來るといふのであります。マアこれは詳しく言へば際限のないことであります。極く簡単に申上げますと、斯様な十の點に眼を着けて、さうして物事を深く見て行くといふのが華嚴の方で言ひます『十玄門』といふことであります。これは佛道の修行をする上に於ても大事なことである。殊に私共はお經などを讀んで見て考へますが、昔から色々な字句に付て説明などがあつた。その字句に付ての説明を讀んで見ると、コンナ枝葉のことにばかりに執はれて居てはいけないなと思つて、コンナ枝葉に執はれないで根本のことを捉まへた方が宜いと思ひますが、併しその枝葉のこと

を抛つて置いて、何だか解らないで根本を捉へようと思つても、やはり根本は捉まらないのであります。だから習つて見れば棄てたくなるやうなことも、一通り習つて置かないとその根本が捉まらない。コンナことをこの頃私は熟々感ずるのであります。近頃法華經の講釋をして見たり、御遺文の講釋などをして見ると、根本ばかり言つて居られな。やはり昔から言はれて居る枝葉の問題を一通り解決して置かないと、この根本が明にならないのです。それですから其の間に大きい、小さいのと言ふべきものではないと、私は熟々思ふのです。知らなければならぬことは皆大事なことであつて、しななければならぬことは皆大事なことです。重い、軽いといつて忒に選び立てをすべきものではない。知るべきことは皆知らなければならぬ。しななければならぬことは皆しななければならぬ。それ／＼意味を有つて居る。斯ういふことを近頃ではよく感ずるの

であります。さういふ風に見ますと、華嚴の方で『十玄』といふことを立て、色々な方面にそれ／＼の深みがあるといふことを説きましたのは、マアそれは法華經に比べれば淺いと日蓮上人が仰しやつた。それは間違ありませんけれども、又斯ういふことに眼を着けて行くといふことも、今日佛道の修行をする者に取つては相當有益な事であらうかと思はれます。それで日蓮上人がつまらなさと仰しやつた華嚴の方の事を、あまり詳しく説明するといふことは變なことですけれども、併しつまらなさとはいふことは、それが値打がないことではない。それよりモツト上のものが法華經の方に説き明かされて居るといふ意味で仰しやつてあるのでありますから、その所を間違のないやうに致したいと思ひます。斯様にして華嚴の方では十玄といふことを申します。それから『六相』といふことも申します。六相といふのはどういふことかと申しますと、

總別
同異
成壞

といふので、六相といふのは物の存在する有様を大體三つに分けます。先づ物が存在する有様を「總」と「別」にするのです。物の全體とその一部分、これが總、別の違ひ。例へば家といふのは總でありまして、天井とか柱とか床とかいふのは別でありま

す。物事を見るにその全體を見なくてはいかぬ。又その全體の中の一つ／＼を見なければならぬといふのが總、別といふ見方です。それから今度は「同、異」同じ所を捉まへれば皆同じだし、違ふことを言へば皆それ／＼違ふ。同じといふ所も見なければいけませんし、又違ふのは違ひ目をよく見て行かなければならない。人間は人間として皆同じ性質を有つて居るといふことも見なければいけませんし、その人／＼で皆性質、氣風、境

相を漏らさないやうに見て行くといふのが、華嚴の方で申します「六相」の説であります。

それから「法界圓融」とありますが、法界といふのは總てのものの存在するといふ意味、天地萬有あらゆるものです、その有らゆるものが一つの力の現れであるといふことを見ますのが法界圓融であります。佛の大きな力に纏められてものが存在するのだ。大きいものも、小さいものも、自然界も、人間界も、皆力が通ひ合つて、相助け、相俟つて存在を保つて行くのだといふことを能く見ます。それが法界圓融といふことでもあります。「圓」といふのは揃ふといふことで、「融」といふのは揃つたものゝ力が通ひ合ふといふことであります。だから圓だけではいかに、圓融でなければならぬ。「圓融」といふ言葉は非常に好い言葉です、揃つた／＼だけではいけない。揃つて別々では仕様がなない。「あそここの家では兩親揃つて結構だ」と言ふけれども、兩親揃つて始終喧嘩

遇がそれ／＼違ふといふことも見て行かなければなりません。そこで同を見ると共に異を見る。同の方に執はれてしまふと空想になる。異の方に執はれてしまふと争が起る。たゞ銘々の立場を固執しまして、親父は親父のことばかり考へる、息子は息子で自分の事ばかり考へて「どうも親父は頭が古い」と考へることになると、皆衝突をすることになりますから、同じことを見ると共に、それ／＼違ひを見て行かなければならぬ。同と異を見ます。

それから物が出来上るか、壊れて行くか。「成、壞」といつて、物の段々出来上つて行く姿も見なければなりませんし、又段々と壊れてなくなつて行く有様も見なければなりません。

斯様に「總、別、同、異、成、壞」この六つの點に就て總てのものをある通りに見て行く、それが六相といふことであります。これは自然界の事を研究するのでも、人間の事を研究するのでも、皆この六

ばかりして居てはチットモ結構ではない。揃ふだけでは仕様がなない。揃つたものが力が通ひ合はなければいけない。そこで圓融といつて、圓は揃つて、融といふのはその力が通ひ合ふ。斯ういふことであります。萬事圓融でなければいけない。數字だけでは總てが現れない。羅馬時代にをかしい話がありました、算術の先生が生徒に教へて居た。二分の二はイコール一、三分の三はイコール一、四分の四はイコール一といふやうなことを教へて居た。それから「皆さん、一つのオレンヂが欲しいか、八分の八のオレンヂが欲しいか」と言つたら、生徒は「先生、一つのオレンヂが宜うございます」と言つた。先生は「今教へたことを忘れましたか、二分の二は一であつて、八分の八は一である、八分の八のオレンヂも一つのオレンヂも同じことですよ」と言つたら「先生、違ひます、オレンヂを八つに切れば汁が出て不味くなります」と言つた。これは生徒の言ふ方

が本當です。成程數字の上では八分の八イコール一だが、實際の上では切ると汁が出て不味くなつてしまふから、オレンヂ一つの儘の方が宜い。さういふ譯で、揃つたものが宜いといふのではない。揃つたものが通じて一つになるのでなければ本當のもではない。そこで圓融といつて有らゆるものが皆集つて、その力が通ひ合つて一つになつて、さうして初めて世の中が良くなるといふことを申します。それが法界圓融であります。

それから「頓極微妙」とありますが、これはシツカリ考へて、さうして直ちに悟るといふこと、「頓」といふ字は直ちといふ意味であります。本當に坐つて考へて居ると、考へて居る所から直ちに極く本當のことが分る。それが「頓極微妙」です。年月には關らない。十年やつても、二十年やつても、三十年やつても、枝葉の問題にはばかり頭を使つて居るならば結局解らないで終るので。大事なことを捉ま

すると吾々も白頭まで章句に死すといふことになり。自分の丈よりも多い本を一冊宛讀んで章句に死してしまふ。この章は何だ、この句は何だばかりで死んでしまふのはつまらない。根本をシツカリと捉まへなければならぬ。枝葉のことも大事であります。この枝葉のことも捉まへて、本當のものを捉まへるといふことをしなければ何にもならない。それが「頓極微妙」であつて、直ちにその極く眞實のことを捉まへなければならぬ。

斯ういふことを修行しなければいかぬといふことが華嚴の中に言つてあるのであつて、さういふやうな色々な教が説いてありますから、華嚴の教といふものは随分深いものである。それで十方のいろ／＼な佛様も相を現はし、一切の菩薩も集つてその教を聞いたといふことが、華嚴經の中にあるのであります。

へてシツカリ考へて行けば、今考へて居る間にその大事なことが捉まつて行く。それが頓極でありませう。「俺は五十年研究した」「俺は三十年研究した」と言つても、チツトモ誇りにならない。枝葉の問題にばかり首を突込んで居れば、死ぬまで解らないで終つてしまふ。これは餘程お經を讀んだり御書を讀んだりする者には大事な點です。本當にシツカリ考へて、根本のものを捉まへようとしなければ、幾ら細かい事を知つたつて、ソツナものは役に立たない。役に立たないこともなからうが、大した役に立たない譯であります。チョツトその意味のことを支那の李太白が、當時の學者を嘲つて「白頭まで章句に死す」と言つて居ります。頭の毛が白くなるまで一章一句ばかりやつて、それで死んでしまふ。「この章は……、この句は……、この意味は……」ソツナことばかりやつて、その内に頭が白髪になつて死んでしまふといふことを言つて居りますが、ウツカリ

土といひ、機といひ、諸佛といひ、始といひ、何事につけてか大法を秘し給べき。されば經文には顯現自在力爲説圓滿經等云云。一部六十卷は一字一點もなく圓滿經なり、譬ば如意寶珠は一粒も無量珠も共に同じ。一粒も萬寶を盡して雨し、萬珠も萬寶を盡すがごとし。華嚴經は一字も萬字も但同事なるべし。

その教を説く場處といひ、又聽く人の機根といひ又佛といひ、又その説き始める時の皆の様子といひお釋迦様が本當に自分のお心持を打明けられて説かれるのだから、何處から言つてもお釋迦様のお悟りになつたことをお隠しになる筈はない。有體に説かれる筈だとマア思はれる。それだから華嚴經の中には「自在力を顯現して爲に圓滿經を説く」と言つて

ある。佛の自在不思議な力を現はして、さうして圓滿といふのは完全な、何も缺くる所のない、申分のない教を佛がお説きになる、斯う言つてある。華嚴經の一部六十卷の一字も一點も悉く圓滿經、佛様のお心持をその儘お説きになつた教だと言つて宜しい。例へば如意寶珠といふ珠は一つの珠だけれどもその一つの珠を持つて居ると、その珠の中から數限りない珠が現れるといふことを言つて居ると同じやうに、この佛様のお心持を打明けられた華嚴經といふものゝ信仰がシツカリと堅くならば、それからして有らゆる人生の問題なり何なりが皆解る、斯う言つて宜しい。華嚴經の中の一字一句が深い意味を現はして、深い人生の解釋になる、斯ういふやうに見ても宜さうに見える。

心佛及衆生の文は、華嚴宗の肝心なるのみならず、法相・三論・眞言・天台の肝要

ども自分の心と、佛と、衆生の間に差別はないのだ。自分が一步步進んで行けば佛になれるし、自分が一步步下落して行けば世間の衆生と皆同じになつてしまふから、心と佛と衆生と差別がないと思はなければいかぬ。ウツカリすれば罪の固まりのやうな人間になる。奮發して行けば佛の境界に行かれる。斯ういふことが「心佛及衆生、是三無差別」斯ういふ華嚴の教なのであります。これも教としては洵に尊い教です。

さういふやうなことを言つて居るのであるから「華嚴宗の肝心」で華嚴宗としては洵にこれは大事なことである、さうして佛道の修行をして居る自分達が、一步誤れば道も教も知らない衆生の境界にまで墮落して行くし、信心を勵んで行けば佛の境界に行ける。この大事な點は、華嚴經の中に説かれて居るけれども、華嚴經ばかりではなく、法相、三論、眞言、天台といふやうな、所謂大乘教に通じての肝

とこそ申候へ。

それだから華嚴經の中には「心佛及衆生」といふことがある。これは「心佛及衆生、是三無差別」といつて、心と佛と及び衆生と、是の三は差別無しといふのであります。「心といふのは佛教を學んで居る吾々の心です。それから「佛」といふのはモウ悟り切つたものですから一番上のものであります。

(佛) (心) (衆生)

それから一番下は「衆生」で一切の人間のことで、佛教を學んで居る吾々の心はチヨウドその中間にある。衆生といふのは佛教も何も知らない、世間の日常生活ばかりをやつて居る者です。上を見れば佛様はモウ及びも付かない程偉い。下を見れば佛も何にも知らない洵に淺ましい衆生で、自分達は丁度その眞中にある。吾々は一一般の衆生よりは幾らか良いが、佛様に比べればつまらないものだ。けれ

要のことに相違ない。此處をシツカリ捉まへなければならぬ筈です。一步が大事だ、チヨウト一つ落ちて行けばドン／＼落ちて行くし、一步向上すればズン／＼上つて行くのだ。だから今の自分といふものは、佛と衆生との眞中に留まつて居るのであつてどつちへ向いて行くかといふことは自分の心の用ひ方に依つて定まるのだ。斯ういふことはモウ華嚴經の中に説かれて居る通りである。

此等程いみじき御經に、何事をか隠すべき。なれども、二乗・闍提不成佛ととかれしは、珠にきずとみゆる上、三處まで始成正覺となのらせ給て、久遠實成の壽量品をときかくさせ給き。珠の破たると、月に雲のかゝれると、日の蝕したるが如し。不思議なりしことなり。

斯様に尊いことを説いて居るお経であるのだから、何の事も隠されない筈だけれども「二乗作佛」といふことは言はれないで、小乗の教を信仰しただけでは永久に佛の境界に到達出来ないといふことを言つて居る。そこがドウモまだ物足らない。小乗の修行だつて、小乗の修行だけではつまらないけれども、一度菩薩の行を勵んで佛に成りたいといふ志を立てて見ると、今まで小乗の修行をして居たその修行は一つも無駄にならないで、皆生きて来る。このことを法華經に言つて居る。そこが法華經といふものは非常に尊い。今までの修行は一つも無駄にならないといふのです。それは自分の慾を抑へるとか、世の中を離れるとかいふやうなことだけで終ればつまらないけれども、併し世の中に求むることのない位の人か、一生懸命になつてこそ世を導き、人を導くことが出来る。自分が世の中の爲に力を盡して行つて、それに依つて報ひが欲しいといふ考であつた

現れて、さうしてお修行をなさつて悟をお開きになつて、吾々に向つてお前達凡夫でも段々修行して行けば佛に成れるぞといつて、生きた手本をお示し下さつたといふことは非常に尊い。そのお手本通りにやつて見ると、吾々は一步步々の修行が皆それ／＼値打を有つて、それ／＼力を有つて行く。そこまで徹底して説かなければ本當の慈悲のある教とは行かないのでありますから、この華嚴の教は如何にも結構だけれども「二乗」即ち聲聞とか縁覺とか「開提不成佛」といつて佛の教を信じないで我儘な行ひをして居る者は、何時までも佛に成れないぞ、斯う言はれて、佛の境界といふことと、凡夫の境界といふことにまだ隔てを置いて説いて居られることがドウモ物足らないことである。華嚴も結構だが、華嚴だけではまだ本當に未法の世に生れた自分達の頼りとなる教とはなれない。斯ういふことを言はれるのであります。

日には、本當に世の爲め人の爲に力を盡すことは出来ない。だから世の中に、求むることのないといふ小乗の修行が、大乘の修行、即ち世を救ふといふこの働きの土臺になつて居る、助けになつて居る。その低い方だけで終つてしまつていかぬけれども、モット進んで高い教を學んで見れば、今まで低い教を學ぶことに力を盡したのは一つも無駄になりはしないといふことが教へられて居るのであります。これは法華經に來ないといふことは説いて居ない。マア華嚴なり或は般若なり、その方面では、小乗の教はつまらないぞ、だから小乗の教を離れて大乘の教、即ち菩薩の行を勵め、斯う言つてある。それも教としては尊いのですけれども、菩薩の行を勵むことになつて見ると、その低い教もやはり役に立つたナ骨折も無駄ではなかつたナといふことを知ることは非常に大事なことです。そこまで行くには法華經より外にない。お釋迦様が凡夫となつてこの世の中に

さうして華嚴の中には、三處まで「始成正覺」といつて、自分は修行をして初めてそこで覺を開いたのだといふことを言つて居らつしやる。これも結構ですけれども、併ながら修行をして覺を開くには、修行しない前から佛になる所の本性がある。そこまで突止めて行かなければ本當ではありません。華嚴の教も結構だが、モウ一步だ。モウ一步といふ所はこれは法華經でなければいけない。そこでどうしても華嚴で修行した者が、モット進んで法華經の信仰に入つたならば、その華嚴の信仰といふことも皆役に立つて行くだらう、生命を持つて行くだらうといふことを言はれる。だからその法華經の壽量品に説かれたやうな、さういふ久遠の、遠い昔からの佛様が居らつしやつて、その力が現れてお釋迦様の説法ともなれば、その久遠の佛のお力に護られて、吾々も佛法を修行して佛になるといふ、この大事なことを華嚴經には隠して、そこまで説かれなかつたとい

ふことは、何だか珠が破れて居るやうであり、又雲に隠れた月を見るやうな具合で以て、ドウモまだ物足らない。又太陽が蝕して、日蝕で缺けて居るやうなものであつて、洵に本意でなかつたといふのであります。

阿含・方等・般若・大日經等は佛説なればいみじき事なれども、華嚴經に對すればいふにかひなし。彼經に祕せんこと此等の經々にとかるべからず。されば諸阿含經に云く、初め成道等云云。大集經に云く、如來成道始めて十六年等云云。淨名經に云く、始め佛樹に坐して力、魔を降す等云云。大日經に云く、我昔道場に坐し等云云。般若仁王經に云く、二十九年等云云。此等は言にたらす。

華嚴のやうな非常に高尚な教でさへも、法華經に

つて、本佛たる、法華經の壽量品にある所の根本から佛である所の絶対の佛といふものが、十分に説き現はされて居ない。それから又淨名經といふのは維摩經でありますが、その維摩經の中には、佛様は「始め佛樹に坐して力、魔を降す」佛陀伽耶の菩提樹の下に坐つてシツカリと自分の考を固めて、さうして惡魔がこれを妨げようとしたのを打拂つて覺を聞かれた、斯ういふことがある。又大日經の中にも「我昔道場に坐して」といふことがあつて、修行して覺を開いたのだといふことになつて居る。又般若仁王經にも、二十九年の間出家をしようか、しまいかと思つて、とつちいつ思案して、到頭修行して覺つた、斯ういふことが言つてある。

只耳目ををどろかす事は、無量義經に華嚴經の唯心法會、方等・般若經の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて、或

比べて見るとまだ物足らないのでありますから、況して「阿含」といふ小乘の教を説いたものや、又「方等」といつて小乘と大乘と兩方に通じたやうな中途の教、或は「般若」といふ菩薩の智慧を主として説かれた教、それから「大日經」といふ大日如來の教、斯ういふやうなものは、何れも佛の教であるからいみじく尊いものであるけれども、華嚴經でさへも法華經に及ばぬのである、さういふ經典は華嚴經に比べればモット下のものだから、さういふ色々な經典に説いて居ることだけを信じて、それで人々が佛に成る道が得られるものではないのである。それから諸阿含經を見ると「初め成道」といつて、お釋迦様は修行した結果佛の境遇になつたと言つてある。大集經にも、如來が成道して、それから十六年の間、教をお説きになつたと言つてある。斯ういふやうに、やはり法華經以外の經典に於ては、修行して然る後に覺を聞かれるといふことばかり言つてあ

は未顯眞實、或は歷劫修行等と下す程の御經に、我先に道場菩提樹の下に端坐すること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たりと、初成道の華嚴經の始成の文に同ぜられし、不思議と打思とこゝろに、此は法華經の序分なれば、正宗の事をいはずもあるべし。

さういふやうに色々な經に於て、釋尊は修行して覺をお開きになつたのであるとのみ言つてあるところ、實に驚いたことに、法華經になりましては佛は初めからの佛だ、斯ういふことで、その法華經をお説きになる前に説かれた色々な教は「未だ眞實を顯はさず」まだ佛様の本當のお心持をスツカリ説いたのではないといふことを言はれて居る。これは實に驚いたことであります。無量義經の中にそのことを言つてある。華嚴經の中の「唯心法界」自分の

心一つで以てドンナ悟でも開ける、ドンナ働きでも出来るといふやうな、さういふ説とか、或は方等・般若經に『海印三昧』混同無二』といふやうなことを言つてあるが、それも随分高い教だけれども、それではまだ佛様のお心持が十分に現はれて居ないといふことを無量義經の中に打明けてある。『海印三昧』といふのは海の水に物の影が映るやうに、自分の心が本當に澄んで来ると人間の眞實の性質が解る。斯ういふことが海印三昧といふことで、三昧といふのはさういふ心の状態の續くことであります。海印三昧、海に物の影が映るやうな、その心持が大乘の修行に依つて後まで續いて行けるのだといふことを申してあるのであります。これは所謂大乘の教を修行する者の智慧が變て佛の具つて居らつしやる智慧に通ずるといふことを説いたものであります。それが海印三昧です。それから『混同無二』といふのは佛と吾々との心が通ひ合ふと一つになつてしまふと

ところが又法華經の中に於ても、初めの間は、自分は道場の菩提樹の下に居つて、端坐すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛の智慧を成就することが出来たと、斯う仰しやつてある。そこだけと言ふと、華嚴經の中にあるのと、法華經の中にあるのと似たやうです。華嚴經の中にも長い間修行して佛に成つたのだといふことが言つてある。ところが法華經の中には、正直に方便を捨て、但だ眞實の事を説くのだ、今までとは違ふぞと言つてあるがやはり菩提樹の下に覺を開いたのだと仰しやつたのでは、これから本當の事だといつても前の華嚴と同じではないか。斯ういふ疑が起きて来る。その疑を解決する爲に壽量品といふものが説かれたのであつて、壽量品まで来なければ、折角法華經を説かれたといふ甲斐がないのだといふことになる。壽量品まで来て、無限の壽命を具へた本佛が、お釋迦様となつて現れて教をお説きになる。又無限の命を具へ

いふことです。違つたものではない。吾々が佛を信ずる。佛の御力が吾々に加はると、力と力とが加つて、今は佛様と吾々とは離れて居るけれども、結局一つになつてしまふといふことが所謂混同無二であります。斯ういふやうなことを華嚴の中には説いてあるのだけれども、それでもまだ未顯眞實だ。未だ本當の眞實の心持は顯はしては居ないのだ。この眞實の心持はこれから説くのだ。即ち法華經に至つて説く。これから自分が眞實の事を説くのであつて、今まではドンナ深いことを説いたやうに見えても、まだ本當の眞實を説いては居ない。だから眞實の事を聴かなければ『歴劫修行』非常に長い年月修行しても、修行した甲斐はないのであつて、マア或る程度の覺は開けるのだけれども、佛に成るといふことは難かしい。斯ういふことを無量義經の中に言つてある。これは實に大勢の人を驚かすべき事です。

た本佛の御力が通ひ合つて吾々にも佛性がある。お釋迦様が教をお説きになるといふことも、吾々がお釋迦様を信ずるといふことも説くのも信ずるのもやはり唯一の本佛の御力の現れたものに外ならぬといふ、此處を打明けられて、初めて『成程本當の信仰の力はソナナものかな』といふことが解るのでありますから、それで壽量品を説いて初めて一切の教に神が籠るのだといふことを言つてあるのであります。そこでその根本が捉まつてからモウ一遍讀直せば、小乗の教でも、方便の教でも洵に尊いものになる。根本を捉まへてからモウ一遍見れば、皆尊いものになる。若しその根本が捉まらないうて居るとその部分々に執はれることになるから、佛の本當の精神は解らぬ。斯ういふことを言はれまして、法華經と云ふもの、就中法華經の本門といふものが如何に偉大なものであるかといふことを説かれるのであります。

それだから幾度も申上げることでありませんが、法華經以外のものは要らないと日蓮上人が仰しやる時には、自分の信仰の中心を定めるに於て法華經以外を振返つて見てはいけない、斯う言はれるのですけれどもその信仰の中心が確立して見れば、有らゆる問題が皆値打のある問題になるのでありますから凡夫の煩惱が何故起るだらうといふことを研究する時には、阿含を見るのも宜しい。菩薩の行を勵むにはどうしたら宜いかを知る爲には、華嚴經を見るのも宜しい。斯ういふことになりまして、中心が確立すればドンナ教でも皆それの値打を有つて來るそれの力を有つて參る譯であります。中心をシツカリと立てないで、唯枝葉の問題にばかり執はれて居つては何時まで経つても仕方がない。斯ういふことを言はれるのであります。

そこで法華經の初めの方の方便品はマア深いものでありますけれども、その方便品あたりでもまだ久へないで、唯言葉の末に執はれると「日蓮上人は法華以外は要らないと言つた、これは非常に窮屈な考だ、澤山の佛様の教を皆闇に葬つてしまふのか」といふ誤解が起るのであります。がさうではない。日蓮上人の御精神のある所をシツカリ汲んで行きますと、これ程大きな教はない、有らゆる教を皆生かして行く教でありますから、これ程大きなものはないといふことに想ひ到るのであります。

(第十一講了)

遠の本佛といふことは説き明かされて居ないから、それは法華經の入口と考へるより仕方がない。それから段々深入りして行つて、壽量品に至りまして初めて本當のことが解るので。斯ういふことをこれから段々説いて行かれるのであります。ですから壽量品が尊いといふことは、壽量品を他のお經から引離して、これだけ見さへすれば他のものは要らないといふ意味ではない。壽量品の本佛といふものを捉まへることが大事であつて、それが捉まつて後にモウ一遍讀み直したならば、どの經どの文句でも、どの言葉でも皆それの生き返つて來る。皆それの値打が出来るのだ、斯ういふことを言つて居られる。ですから法華經の信仰といふものは非常に包容的なものであります。有らゆるものを皆包容する。しかし中心をグラグラとしてはいけない、中心がシツカリ立つて居れば、總てのものが皆役に立つ、斯ういふことを言はれるのであります。そこを所を能く考

諸の説く所の法 其義趣に隨つて
皆實相と相違背せじ、若し俗間の經
書 治世の語言 資生の業等を説か
んも 皆正法に順ぜん。

法華經卷第六

大なる悦び歎(下篇)

ま ん じ

時頼の荒々しく立つて奥に入らうとした瞬間に、

聖人素早く其の裾をキツト抑へて、

「暫らく々々々、今一言申上ぐる大事あり」と満座に徹する大梵音、

「若し拙僧の申すこと御用ひなくば、懸て残りの

二難即ち御一門中にと士討の軍起り、猶且つそれのみならず、次には隣國より大軍我國を襲はんとは必定でござる。懸て御自身には悲しい哉死して必ず惡道に墮ちらるべし、其の時に後悔あるとも及ばず、幸に急ぎ頑首を聞かれよ」

聖人渾身の苦衷も徒らに反感を募らすばかり苦盡を喰んだやうな顔して彼は無言の儘奥へと消へた。縁

鎌倉中の武士も町人も、僧侶も尼御前も、それからそれへと燎原の火の様に、聖人に對する惡罵は刻々に擴まつた。今に何か變事でも發らねばと、日朝日昭等のお弟子達、並に富木、四條其他の有力な外護の信者等警戒を加へて居たが、聖人は寧ろ虚心坦懐彌々師子吼の増すばかり……

お經の中には、末法に於て法華經を弘通せん者、迹化他方の菩薩等の堪へ忍ぶことの出来ぬ三類の強敵と申して、在家の權威者や、僧侶の仲間、殊に生如來だ、羅漢様だと世間で尊ばれる聖僧の迫害重疊して來るとのことであるが、果せるかな、この事件のあつた一ヶ月十日ばかりの後、即ち八月二十七日秋の日は早や暮れて、庭の草陰に蟋蟀の音もそぞろに耳を傾けさせたのが、ピタリと止まつたかと思ふ一刹那、此處松葉ヶ谷の御草庵にドツと喚聲があがると同時に火は四方に起つた。當時の有様を、聖人は後年、身延から下山兵庫殿への御消息中に記されてゐる。

無き衆生は濟度し難きぞ是非もない。

其昔楚人卞和が璞を抱いて荆山に泣きつゝ歸つたやうに、大忠を懐いて微望も達せられない聖人は靜かに御題目を唱へつゝ松葉ヶ谷の庵にと歩を運ばれた。

「皆の衆、聞かれたか、日蓮房こそ執權殿のお憎しみを受けたそうぢや、要もない出過ぎ者、本來ならばお手討にもなるべきだが、出家に免じて許されたとか、此上は我等にも法敵、彌陀の佛敵、此儘に捨てゝは置けない、宜しく佛罰を見せてくれんぞ」

「國主の御用ひなき法師なればあやまちたりとも科あらじとやおもひけん、念佛者並に檀那等又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし、夜中に日蓮が小庵に數千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかんがしたりけん其の夜の害もまぬがれぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて大事の政道を破る」云云

即ち國主とは北條執權を指されたもので、建長の春立教以來念佛は無間の業だと折伏され、いましむしいと齒嚙せる念佛門徒等が共謀して、それに或る地位にある人々も暴徒に加擔して夜討といふ大それた罪科をも默認したやうなことは、泰時、時房に依つて制定された貞永式目に違反したものと指彈せられたのである。

貞永式目五十一箇條は主として守護、地頭、知行所領に關する規定であつて、謀叛、殺害、刃傷、惡口、歐打、讒訴、犯奸、強盜、竊盜、奴婢雜人等の罪科あるものゝ處分が規定せられてある。その第十

記事

本部團報

大講演會 今回支那問題の勃發せるに就て、純後各宗教會の活躍は佛教徒が一番であるとの輿論であるが、それは従軍僧もあれば、獻金群もあり、國聯會も見聞する。久しく賦税を食つてゐた彼等も、當然起つざるを得なくなつた。

纏つて惟ふに、愛に事新らしくいふ迄もなく、今後の戦はその武力、經濟の戦以外に思想の戦がある。この第三の戦こそ最も警戒すべきものであり、教家の第一線に建闘すべき責任を自覺せねばならぬ。今や世界は人民戦線の網に包圍されんとする形勢に對して、包容的中心主義を以て毅然たる論議の起轉を開始するべきである。大家無明雜起の思想と、我佛界雜起の主張との建闘は、全人類の吉凶の岐途ともいふべきである。斯の大事を眼前にして教家は寸秒たりとも安逸を許さるべきであるまい、大に異體同心の實を擧げずばなるまい。何日迄も兄弟説ひ合つて居る時ではない、自己の財名に執はれて居る場合でない、根本の題目から直ちに事實の上に躍り出づべき活きた妙法蓮華經でなくてはならぬ。

そこで本團に於ては、通州暴虐第三七日速夜を下して、日支事變犠牲者並に通州殉難者追悼法要と教化大講演會を開催した。恁る全

てに對して、會館所在地の山本町會長は双手を擧げて賛意を表され、自らこの五、七、八、九日目の町會長を説いて協力思想善導に盡力下さつたお蔭で滿員の盛況裡に、定刻七時、小西日喜師及び山口智光師等に依り追悼法要を齋み、各焼香に其深の敬意を表し、同四十分講演會に移つた。

磯部理事の簡潔なる紹介につれ、陸軍省新聞班歩兵少佐石川治水氏は、數葉の關係大地圖を描しつゝ、北支事變の真相を講述し、續いて九時四十分貴族院議員井上清純男は、皇國の使命と支那問題に就いて極めて重要な意見を披露され、多大なる感動と發憤を一同に與へて十時四十五分降壇された。最後に題目を三唱閉會を告げたのであつた。

因に來會者一同へ、野村大將の「非常時と我國防」と題する小冊子を贈呈した。

曉天動行會 八月の炎熱灼く如き一日を愉快に過ごすには、朝の修行が甚だ有効である。一般には六時からラヂオ體操が威勢よく行はれてゐるが、吾等は五時三十分から六時三十分迄一時間、妙法蓮華經を一品乃至二三品宛讀誦し、お叱の底から力強く唱題する所に、全身の惡氣は玉の汗となつて流れ去り、清淨なる心境は得もいはいれない。日蓮聖人が「心甲斐なければ多くの能無用なり」と仰せられて居ることをしつゝと味ひ、有難い暑中を送ることが出来た。

團費誌料寄附及維持費領收

(自七月二十一日至八月二十日)

一金拾圓也	甲府	高野	毅殿	一金拾圓也	同	何某	殿
一金壹圓貳拾錢也	福岡縣	秋山	照代殿	一金六拾圓也	同	横濱	中村清兵衛殿
一金貳圓五拾錢也	東京	京岸野藤右衛門殿		一金壹圓貳拾錢也	同	京田	爲太郎殿
一金壹圓貳拾錢也	水戸	前刀	實清殿	一金壹圓也	東京	越山	雄四郎殿
一金貳拾圓也	東京	井上達太郎殿		一金貳圓貳拾錢也	富山縣	龜田	秀之助殿
一金壹圓貳拾錢也	名古屋	石田よしの殿		一金貳圓貳拾錢也	大連	重松	弘通殿
一金拾圓也	東京	同心	令殿	一金貳圓貳拾錢也	東京	和岡	雪雄殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪	富田	清子殿	一金四圓四拾錢也	東京	小峰	費子殿
一金貳圓五拾錢也	横濱	吉村	頼治殿	一金壹圓也	同	三吉	顯隆殿
一金貳圓五拾錢也	名古屋	牛田	共保殿	一金貳拾圓也	東京	柴田	武治殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	寺澤	信平殿	一金壹圓貳拾錢也	同	本郷	富次郎殿
一金貳圓貳拾錢也	山形縣	遠藤貞次郎殿					
一金五圓也	東京	山田	英二殿				
一金壹圓貳拾錢也	鳥根縣	長岡	義貞殿				
一金壹圓貳拾錢也	千葉縣	並木	博殿				

右程有入帳仕候也

財團法人統一團會計

編輯室より

時の力といふものは強いもので、數年來、日毎月毎に宗教の正しい信仰を心ある人は叫んでゐたが、馬耳東風の狀態であつた。最近それが到る處祈願の聲を聞く。この祈願から少し落付けば、次は信仰生活へと進展するであらう、否せしめねばなるまい。

國外に事變發生して、國內忽ちすべて統制されて來たのは何よりも歎ばしい、願くは宗教の上に於てもこの統一を覺るべき機運は既に熟して居る、要は自他彼此の心を捨てることである。

世間の淺い事には、集りもよい、共鳴者も多いが、佛法の深義は條程しつかりした者でないといふ。これは當然な事だと打捨て、はおけない、そこに西強毒之の折伏立行は猛烈としておこる。

今月は各方面から御寄稿を戴いた、皆さんの雑誌として「シノ」御高見御漏し下さい、尤も取捨は御一任願ひます。

題字	頭山 滿先生
題字	宮中顧問官 小笠原長生閣下
題字	海軍大將 山本英輔閣下
題字	海軍中將 佐藤鐵太郎閣下
題字	貴族院議員 佐藤鐵太郎閣下
口繪	著者所藏の日蓮聖人御眞筆
口繪	佛舍利を前にしたる著者肖像

小林日種師著 (吉田信二畫伯裝禎)

日蓮

上卷



自由人トシテ描カレタル聖日蓮ノ全貌ヲ見ヨ。執筆刊行トモニ海外ニ於ケル初メテノ企テ!

菊判—三百三十六頁
 天金・クロイヌ製の豪華版
 挿繪カッ卜百四十餘
 定價米金貳券 送料二十四仙

布哇に於ける最大の日刊新聞たる布哇報知紙上に連載して好評を博したる本著は愈々新裝して出づ! 下巻は目下連載中にて終了を待つて直ちに出版の豫定

發行所 布哇、インノル市、日布哇報知社
 取次所 布哇、インノル市、顯本山法華經寺

正法に由りて王たることを得

國人の皆破散すること

惡風起りて恒なく

妖星變怪多く

五穀と衆の華果

國土は飢饉に遭ふ

若し王正法を捨て、

諸天は本宮に處し

彼の諸の天王衆

此の王非法を作す

王位久しく安んぜず

彼の忿を懐くに由るが故に

非法を以て人を教へ

鬪諍して奸僞多く

而も其の法を行ぜずんば

象の蓮池を踏むが如し

暴風非時に下り

日月蝕して光無し

果實皆成せず

王の正法を捨つるに由る

惡法を以て人を化すれば

見已りて憂惱を生ず

共に是の如きの言を作す

惡黨相親附し

諸天皆忿恨す

其の國當に敗亡すべし

國內に流行せば

疾疫は衆苦を生ず

天主は護念せず

國土は當に滅亡すべし。

國中の最たる大臣

其の心に諂佞を懷き

非法を行ずる者を見ては

善法を行ずに人に於て

惡人を愛敬し

星宿及び風雨

其の國界の中に於て

少力にして勇勢無く

寧ろ生命を捨つとも

親及び非親に於て

若し正法の王爲らば

法王の名稱有りて

餘天は咸く捨棄し

及び諸の輔相

並に悉く非法を行ず

而も愛敬を生じ

苦楚して治罰す

善人を治罰するに由るが故に

皆時を以て行はれず

所有の衆生の類

所作堪能ならず

非法の友に隨はず

平等に一切を觀ぜよ

國內に偏黨無し

普く三界の中に聞ゆ

王の正法の化に因りて

天衆皆歡喜し

法を以て衆生を化して

彼の一切の人をして

率土常に豊樂にして

王は法を以て人を化し

常に好き名稱を得

常に心に歡喜を得

共に人王を護る。

恒に安隱を得せしむ

十善を修行せしめ

國土の安寧を得ん

善く惡行を調へば

諸の衆生を安樂すべし

爾の時に、大地一切の人王及び諸大衆、佛の此の古昔人王の治國の要法を説きたまふを聞いて、未曾有なることを得 皆大に歡喜し信受し奉行しき。

金光明最勝王經卷第九

善生王品第二十一

爾の時に、世尊 諸の大衆の爲めに王法正論を説き已つて、復た大衆に告げたまはく、汝等應に聽くべし、我れ今、汝が爲めに其の往昔の奉法の因縁を説かん、即ち是の時に於て

伽他を説いて曰く

我れ昔し曾て轉輪王と爲り
此の大地並に大海四洲の
珍寶皆充滿せるを捨て、
持以て諸の如來を供養す

諸天藥叉護持品第二十二

授記品第二十三

除病品第二十四

長者子流水品第二十五

金光明最勝王經卷第十

捨身品第二十六

十方菩薩讚歎品第二十七

妙幢菩薩讚歎品第二十八

菩提樹神讚歎品第二十九

大辯才天女讚歎品第三十

付囑品第三十一

金光明

金光明經

第九套の一

北京三藏法師曇無讖譯

序品第一

是の如く我れ聞きき、一時 佛 王舎大城、耆闍崛山に住したまひき。是の時に 如來 無量甚深の法性、諸佛の行處に遊びたまひ、諸の菩薩の所行清淨なるに過ぎたり。

是の金光明は

諸經の王なり

若し聞く者有らば

則ち能く無上微妙

甚深の義を思惟せん

壽量品第二

爾の時に 王舎城の中に 菩薩摩訶薩有り。名を信相と曰ふ。是の思惟を作さく、何の因何の緣あつてか 釋迦如來の壽命短促にして方に八十年なる。大士 是の如く至心に佛を念じ、是の義を思ふ時、其室自然に廣博にして衆寶合成せり。蓮華上に於て 四如來あり。東方を阿閼と名づけ、南方を寶相と名づけ、西方を無量壽と

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		送料共	金貳圓九拾錢
日蓮主義精要		送料共	金拾五拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰		送料共	金五拾錢
法華經要品		送料共	金參圓廿五錢
日生上人レコード(四面)		送料共	金拾錢
日蓮聖人		送料共	金貳拾錢
本尊意識に就て		送料共	金貳拾錢
釋尊の八相成道		送料共	金壹圓五拾錢
法華經の心髓		送料共	金壹圓五拾錢
佛舎講義		送料共	金壹圓七拾錢
本多日生上人		送料共	金拾錢
勸行作法		送料共	金壹圓
河合砂明著		送料共	金壹圓
皇道と日蓮主義		送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人 統一出版部
東京東區九四二〇番

月刊「教」誌

東京市小石川區音羽町六ノ十七
振替口座東京一〇九四〇番

「教」誌
發行所

統一價定
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半年 金壹圓貳拾錢 送料共
一年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込へ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十二年八月廿七日 印刷納本
昭和十二年九月一日 發行
(第五十號)

不許複製
編輯部 磯部 滿事
發行所 東京市四谷區内藤町一
印刷所 東京市小石川區音羽町八ノ十一
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 財團法人 統一團
東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

聖訓摘要	本多日生
日蓮宗概観(其十)	故梶本多日生
開目鈔講話(第十二講)	小林一郎
日支事變と宗教運動	磯部滿事
立正安國の理想と日本精神	守屋貫教
鎌倉の奥津城二つ	笹木欣爾
記事	
○本部調報	
大藏經要義續篇(其七)	本多日生
○福島教信	
○編輯室より	